

外国人のみた日本 実際の日本人 (カルチャー・ショック)

著者	Sour Heng, 梶山 貴史[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	119
ページ	47-47
発行年	2005-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005655

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Sour Heng

出身地：カンボジア・プノンペン
所属：早稲田大学大学院博士課程
日本滞在：2000年4月～

実際の日本人

スール・ヘン

私は内戦が勃発した国で生まれ育ったので、海外で仕事や研究をするための競争は熾烈であった。だが、幸い私は日本政府の奨学金を勝ち取れた数少ないうちの一人になった。そのために熱心に勉強してきたので、なおさら私は興奮していた。多くのカンボジア人はアメリカと日本の二カ国を、より高度な教育や仕事の経験が得られる国々であると夢見ていたからである。しかし日本は、経済力以外ではカンボジアと似通っており、しかもカンボジアの復興に積極的に携わってきたため、私は最終的にアメリカではなく日本行きに決めた。

ところで正直なところ、私は来日前に不安があった。来日時期が近づくにつれ、食べ物や日本人とのつきあい方、生活費が私の不安材料にならないだろうか、とよく自問したことを覚えている。恐ろしくも鍛えられたサムライやニンジャも、私の脳裏に絶えず存在した。彼らはあまり怖くはないかもしれないが、香港映画で見たものには不安があった。サムライは物静かだが友好的ではなく、鍛えられた暴力的な集団だ。その映画に登場したサムライが日本に実在したら、私は日本でいかに生活できようか。しかも私は日本の輸入規制を批判したアメリカの書物を読み、日本人に失望してし

まった。その上韓国や中国のニュースであったと思うが、彼らに対する第二次大戦中の日本軍の行方も知り、失望感が増大した。日本への出発までには、日本人は外国人に対して友好的ではない、と十中八九思わざるをえなかった。そのためカンボジアを飛び立った飛行機内でも、日本滞在中、日本人の不親切さにショックを受けまいよう、自分に言い聞かせたのだった。

六時間以上飛行機に乗り、四月上旬の天気が良い朝に、この「日出ずる国」に到着した。いかなる不運も予測していたため、私はかえってリラックスしていた。私は日本人にネガティブな印象を持っていたため、日本到着時に入国審査を待つ外国人の長蛇の列にさえ驚かなかった。

だが、入国審査のブース前に辿り着くと、入国審査官は微笑みながら歓迎のジェスチャーをし、「パスポート、プリーズ」と言った。「あれ？ここは日本？明らかにここは日本だ。でも、なぜこんなに日本人の印象が良いのだろうか？」と自問自答した。思い描いていた日本人の不親切さは、微塵も感じなかった。物静かに立っていた税関職員は、私が近づくくと微笑み、礼儀正しく感じられるジェスチャーまでしてくれた。成田空港で日本人の印象が良かったため、

かえってその態度に私はショックを受けてしまった。

時が経つのは早く、来日以来、既に数年間が経過した。日本人の友人、教授、同僚と長く過ごせば過ごすほど、私が日本国民を誤解していたことを痛感した。私があの香港映画で見た、物静かで厳しく暴力的なサムライは、フィクションにすぎなかったのだ。本来のサムライは義理堅く、礼儀正しく、つましく生計を営んでいたのだと思う。それは、肯定的にとらえるべき点であり、日本での滞在中に私が出会った日本人や、あの入国審査官などが示した高い規律に通じるものがあるのではないか。

今となつては、日本人は違法行為者だけに厳しい罰則を科すことが分かった。日本人は、責任感があり誠実な外国人には友好的なのだ。私の日本人の友人の一人が「日本人は優しい。でも、厳しい」と私に言った。私に「厳しい」と受け取りたい。外国人はこの「厳しい」を恐れるべきではない。「厳しい」は違法行為者のみに対する最終手段であるからだ。規則に従っていれば、怖がることは何もない。(インターンシップ生/訳 梶山貴史)